

令和元年度第2回福岡市子ども読書活動推進会議議事録

日 時	令和2年1月28日（火）10:00~12:00
場 所	福岡市役所 1504 会議室
議 題	・福岡市子ども読書活動推進計画（第3次）進捗状況 ・福岡市小・中学校の読書活動について
公開・非公開の別	公開
傍聴人の数	なし

1 開会

委員長挨拶、各団体活動紹介

白根委員長 新型肺炎が日本に入ってきて落ち着かない。本来なら局地的に終息して風土病として片付いていたと思うが、グローバル化に伴う負の側面ではないかと思う。何事もプラスの面、マイナスの面がありインターネット環境にもいい面も悪い面もある。これから生きる子ども達はその便利なものの負の面をしっかりと見極めて上手に賢く使いこなしていくような知性が求められる。私達以上に求められるのではないかと思うが、知性の土台となるのは言葉の力、言葉による思考力であり、知性を育てるうえで読書は大変大きな役割を担っていると思う。これからも多くの子供達が読書を通して知性を養っていきけるような取組みを福岡市でもやっていきたいと思っている。

私自身は、昨年3月に短大教員の専任は辞め、現在は非常勤として週に1、2回授業をしている。一人でも多くの子どもに、その子にとっての1冊の本と出会ってほしい、そして読書に親しんでほしいという思いを込め、読書の大切さを伝えている。福岡市の事業の読書ボランティア、読み聞かせなどに協力をさせていただいている。

三宅副委員長 子どもとメディアの全国フォーラム第10回目を日本医師会と日本小児科医会と私どもの団体が共催で東京の日本医師会館で実施した。福岡会場を設けweb中継をしたが東京も福岡も多くのキャンセル待ちがでた。東北大学の川島隆太先生に脳から子どもの発達があるという基調講演をお願いし、神奈川県久里浜医療センターで子どものゲーム依存の治療に積極的に取り組んでおられる樋口先生もお招きした。さらに、生命誌研究をされている中村桂子先生に生命誌の観点から、今この時代の子ども達がどう生きていくのか話をしていただいた。全体テーマが「技術革新は子ども達を幸せにするのか」で、上手に使いこなせば良いと私達も考えているが、特に人間の基礎を積み重ねていかないといけない乳幼児期に本当にそれでいいのだろうかと思き付けられた集会だった。私達は子ども達をどの方向に連れて行こうとしているのかをもう一度きちんと考えなくてはいいのではないかと。また、12月には毎年福岡市でNPOが集まって市民フォーラム「子どもに優しいまちづくり」を開催しており、子どもの権

利条約を私達の住んでいる地域で実現していくことを全体テーマとしているが、そこで長阿彌幹生さんを座長として「子どもと学校」の分科会を持った。36人が参加し、うち小学生2人、中学生3人、高校生1人、学校の先生4人、その他文庫の方や学童保育、市民活動をしている方など、6グループに分かれてワークショップをした。学校に関するテーマでグループディスカッションしたが、キーワードに学校図書と入れたら「図書館の本をもっとたくさん借りたい」「日曜日も開ければいいのに」「暗いから明るくしてほしい」「司書の先生がいつもいてくれたらいいのに」との意見が子どもからも大人からも出た。皆さん学校図書館とか司書の先生とかに期待を持っていることがグループディスカッションの中で浮かび上がってきた。今日の会議のいろんな意見をフィードバックしていきたい。

高木委員 福岡市は中学生の読書量が非常に少なく、小学校は全国を5冊程超えているが、中学校は2冊程度少ない。本を好きな子はいるけれども割合は少ない。前回も司書の問題があがったが、もっと大きな動きをつくらないと変わらないと思う。私の中学校は今年、全学年でSDGsをテーマにした探求学習を始めたが、学校図書館が子ども達に開放されていなかったのも、美術の授業の中で図書館を美術館にするために福岡市美術館からレプリカを貸りて鑑賞会をした。子ども達が本を読まないこととは別の発想で考えていきたいと思っている。

西川委員 小学校図書館教育研究委員会で昨年度は8回研修会を持ち、本年度は若い先生達も増えたのもう一度原点に立ち返る意味で、ブックトークについての研究を進めてきた。検証授業を1回行い、図書館の環境を含め、ブックトークの仕方や選書の仕方を研究した。現在冊子にまとめている段階で、全市に発信していきたいと考えている。来年度教科書が変わるので、もう一度読書活動ができる単元を洗い出し、来年度も引き続き研究を進めていきたい。

松本委員 今年小学校が37日、中学校が18日か19日の5校勤務となり、たいした仕事できていない。私の担当校の東光小学校はモデル的な学校で、福岡県学校図書館協議会や学校図書館コンクールで優秀校に選ばれた。今年優秀校をねらう上で今までにプラスしてやったのが家読である。アンケートを取ったが、ほぼ全員の保護者が回答。その中身が非常によく、今まで読書教育の長い歴史があったからこそその取組で、改めて地域や家庭や学校での取組が実を結ぶことを痛感した年だった。

白井委員 私の校区の中学校はなかなか子ども達が学校図書館に足が向かないので、どうにかできたらいいと思う。「背高泡立草」で芥川賞を受賞された古川真人さんが福岡市出身で、自分たちの住んでいる校区の小学校、中学校の卒業生らしいとの情報等を子ども達に発信したりして、本に興味を持ってもらえたらよいと思う。

立石委員 今年度は10月の絵本ふれあい研修会にNPOのブックスタートの講師を呼び、3部構成で講演会、研修会、勉強会をした。ブックスタートの原点はどういうことかを共有し、今後の活動に役立てていこうと再確認した。乳幼児4ヵ月健診の時に絵本を渡すだけではなく、体験をプレゼントすること、リードブックではなくシェアブック。一緒にその場で1冊本を読み、わらべうたを歌い、母親も一緒に本を楽しむことを発し、赤ちゃんと個別に対応することを各区でやっている。1回の健診に配置人員は2名だが各区ばらつきがあり、実質1回に90名来られる区もあれば30名、40名という区もある。1日に2名だけ入っても充足しているところはなく、配置人数を増やせないかと私達は声をあげている。状況的に難しいのであれば工夫するといけないが、人間の基礎を司る大事な時期を逃さずにお母さんに伝えていく活動がとても大切ではないかと実感している。11月の子ども読書フォーラムに7区のメンバーが参加し、各区毎回プログラムを工夫して、赤ちゃんだけではなくきょうだい、お母さん、お父さん、おばあちゃん達と世代を超えて楽しんだ様子がとてもよかったので続けていけたらと思っている。

上村委員 平成20年に、小学校で読み聞かせのボランティア活動が円滑になるよう情報を得る場として、横の繋がりを持つことで発足した。中央区を中心に活動し、初めて読み聞かせを始める方のための初期研修会を6月末か7月頃に毎年行い、少し経験を積んだ方のためには科学の絵本や、高学年向けの絵本に絞った毎年研修会を行っている。今年は原点にかえろうと長く読み継がれてきた絵本を実演したり、小学校で読み聞かせをしたらよかったとの経験を話し合ったりして、その魅力を再認識する研修会を行った。英語やパソコンの教育が入り、読み聞かせの時間が削られてきているので少しでもくい止めたいと思っている。学校司書がもっと長くいてくれるのが望ましい。地域のボランティアの人達が生き生きと活動し、小・中学校とも連携がとれるような仕組みができたらいいいと思っている。

香川委員 福岡おはなしの会は、総合図書館を中心に活動している。本年度も毎週日曜日の幼児向けと小学生向けのおはなし会、月1回の赤ちゃんおはなし会、5月5日こどもの日のおはなし会、7月28日に夏休みの1日おはなし会、12月22日のクリスマスおはなし会をした。11月30日の子ども読書フォーラムにも参加した。図書館でのおはなし会を中心に活動していると、子ども達は本当に絵本やお話が好きだと思う。小学校へ出向いたり市の資料をみたりすると好きな子とそうでない子、読む子と読まない子の差は本当に大きくなっていると思う。今後私達に出来ることは何だろう、どのようなことができるのだろうかと思案中。

岡田委員 総合図書館の団体貸出の部署で、幼稚園、小学校、地域文庫、公民館に本を貸し出している。毎年開催している地域文庫交流会では、地域文庫や公民館文庫同士の情報交換や講演会を実施しており、今年度の講演では実践的で簡単だが効果的な展示方法

を紹介の予定である。図書館内でYA（ヤングアダルト）を研究する会に入り TRPG（テーブルロールプレイングゲーム）のイベントをやっている。昨年ビブリオバトルの全国大会予選が福岡市総合図書館であったが、すごい読書量の子ども達が上手に本を紹介する。本が好きな子達に、本を読まない子を本と結びつける活動として、図書館のYAサポーターに取組んでもらい、本が好きな子達を核にYA世代のつながりができればと考えている。子ども読書フォーラムではYAコーナーでYA通信を紹介した。そこで本の展示やボードゲームをしたが、ゲームばかりになると思ったのに、意外と本をしっかり見てくれ、過去のYA通信をとっていく子達が多かったのも一つの手だと実感した。

中島委員 公民館主催事業の乳幼児ふれあい学級で母子のふれあいや育児に関する勉強会を行っており、絵本の読み聞かせで母子のふれあいの時間を持ち、泣いている子も読みだすと静かに聞くことから子どもは本が好きだと実感している。月1回土曜日に文庫活動として小学生向けに本の読み聞かせを行っているが、留守家庭子ども会の20名近くが楽しそうに参加している。公民館の図書室を週に1回1時間程開放している。自由に本を読める、勉強ができる、友達とふれあうことができると、子ども達がたくさん来るようになった。本を借りに来る人の差はあるが大人にも定着してよかったと思う。小学校の朝読に私もボランティアで参加しているが、絵を見せなくても言葉だけでわかるのが素晴らしいと思う。いつも子ども達から元気をもらっている。

安永委員 書店では不況が20年くらい続いている。店で待っていても客足は無く、組合の若手がやることがないと言う。その若手が地方の学校へ読み聞かせに行ったが、そこでは校長先生も参加し読んでいる。若手を誘い子ども読書フォーラムへ参加しているが、これを福岡市だけでなく各市でやってもらいたい。人口が多いところであればやるのではないかな。そうすれば、本屋も若手に手伝えと言えるのではないかなと思う。今、このようなフォーラムをある程度大きくやっているのは福岡市だけではないか。今年はこのような催しを各市の教育委員会とやれたらと思っている。

2 報告

(1) 福岡市子ども読書活動推進計画（第3次）進捗状況について

資料に基づき事務局説明

松本委員 発達段階に応じた子どもと本とメディアの中で、福岡市に本社があるゲーム会社の本や読書についてのアンケートを依頼とあるが、ぜひ実現させてほしい。メディアやネット情報は、私達が思っている以上に子ども達は知っていて、そこから派生して読書に繋がることをよく耳にする。ゲーム制作者は本を読んでいる人達だと思う。そういう人達から発信してくれたらもっと図書館などで本を読む子達になっていくのではないかと期待している。

学校指導課 読書量の調査結果について、毎年 11 月に全市立小中学校を対象に各学年から 1 クラス抽出して調査を実施しており、中学校は小学校に比べて読み上げ冊数は少ない。全国と比較しても小学校は高いという結果である。ただし福岡市は 1 年生から 6 年生を対象とした調査で、文科省は 4 年生から 6 年生を対象にしているため、福岡市も同様にすると本年度は 10.6 冊で全国を下回っている。昨年はそれでも全国を上回っていたことから大きな衝撃を受け、分析をしっかりとしないといけないと思っている。昨年度から本年度に比べて増えている学校、あるいは減っている学校がどのくらいの割合であるのかだが、昨年比だと小学校は増えている小学校が 58 校、割合は 40.3%、逆に減っているのが 6 割ぐらいである。中学校は、増えている学校が 46%、減っている学校が約半数、増減無しが 2 校あり、中学校は頑張っていることがわかる。さらに、この 3 年間を見ると、29 年度から 2 年連続で増えている学校は、小学校が 22 校で全体の割合は 15%。中学校が 11 校で、割合は 15.9%。逆に減っている学校は、小学校は 33 校で 22.9%、中学校は 18 校で 26%。母数が違うので多少統計的な誤差があるが、2 年連続で減っているとか増えているとか、その取組は注視すべきだと思う。さらに全国との平均で上回っている学校数だが、本年度は小学校で 11.3 冊以上を記録した学校が 89 校、61.8%で全校の半数以上となっている。下回っている小学校は 55 校で 38.2%。一方、中学校は全国平均を上回っている学校が 8 校で全体の 11.6%、下回っている学校が 61 校で 88.4%。おそらく中学校の読み上げ冊数 2.7 冊という結果は、これに帰しているのではないかと思う。分析を他の視点でも進めており、これまでの取組の中でも、読書量は確かに大事なところだが、多く読ませようとする取組は少し意識が偏っていないか反省があった。どんな本をどのくらいの発達段階で読んでいるのかに手を入れ、図書館の読書機能、学習機能、情報機能と 3 つある部分のどこにウェイトを置けばいいのか学年によって調査し、児童生徒のニーズを考えないといけない。もう 1 点、中学校の読書量については指摘があり、学校訪問する度に聞いてきたが、今電車で中高生を見ると本を読んでいる子はほとんどいない。中高生だけではなく大人もそうである。1 週間電車内で調べたが 9 割以上スマホを扱っている。逆に私は本をずっと読むので本を開くと非常に浮いている。中学生になぜ本を読まないのかを直接聞くと、一番多かった意見は忙しいだった。確かに授業が終わってから部活に行き、家に帰り、それから塾に行ったり宿題をしたりと忙しく、平日も土日もほとんど本をゆっくり開く時間がない。小学校まで読書が盛んだった子が中学校になって少なくなるのは必然だと実感した。本当に本が好きな子は本を読むことでリラックスできるため、そういう子はそれでいいが、本を読むことが疲れる子はもっと別のアプローチが必要ではないかと考えた。そういう子に本を読んでリラックスしろとは無理な話である。我々としては実態を細かく調べ分析し、取組に生かす必要があると反省している。

白根委員長 全国の数値との違いなどを説明していただき、いろいろと真剣に取り組んでいることが伝わってきた。中学生になって本を楽しめないのは、幼児期からの積み重ねの有無

も大きな要因になっているのではないかと思います。

総合図書館　総合図書館では蔵書の充実を図り、科学に関する知識の本や比較的回転率が高く損傷の激しい赤ちゃん向け絵本を重点的に、蔵書の補充を行っている。毎週土曜日曜におはなし会を実施し、最終土曜は各読書相談員が創意工夫をこらし、特別な内容のおはなし会を企画し好評を得ている。学校図書館支援センターでは、以前から玄界、小呂といった離島の現地に直接読書相談員が赴き支援していたが、本年度からそれに加え小規模学校へも読書相談員が直接訪問支援している。小学生読書リーダーは毎年200名以上の参加があり好評である。来年度は中学生版の実施を検討しており、現実的になったら紹介させてもらいたい。積極的な参加、案内や便宜を図っていただければと考えている。

白根委員長　総合図書館と学校図書館との連携を進めて活動を広げていただけるとありがたいと思う。それでは次第3協議へ進みたい。小中学生の読書活動について事務局から説明をお願いする。

3 協議

(1) 福岡市小・中学校の読書活動について

事務局説明

白根委員長　本日欠席の宮本委員からの意見を読ませていただく。「今後の取組については、学校によって状況が違うので市全体に広げるのは労力的な割に効果はどうかと思う。朝読書の取組をしている学校としていない学校の読書量の違いを検討してみるとよいと思う。読まない生徒の冊数を上げるためには図書館司書の常駐が必要だと思う。図書館の位置づけをしっかりと考えて意識を高め、取り組みやすい環境をつくるともっと活動し易くなると思う。その他の意見として、電子機器の普及により紙媒体の本離れが社会的現象となり、身近な町の本屋がなくなってきている社会において、とにかく本を目にする、本にさわる、そんな機会を増やすことが重要だと思う。学校図書館、地域の図書館が常にかいていて、小学校でも図書館で過ごす時間を授業のカリキュラムに入れる取組がますます必要になってくる。」

1月19日付の西日本新聞に、学校図書館や学校司書のことが大きく取り上げられていた。今度の市議会で議員からも学校司書について質問が寄せられており、注目されていると嬉しく思った。

三宅副委員長　子どもの生活全般の見直しを大人たちはしなくてはならないのではないかとすごく感じた。時間の無い中で、読みたい子もいるが、その時間を確保できていない現実を目にしている。今の社会現状を大人がもう一度とらえ直さなければならないと強く感じる。

学校指導課　本が好きな中学生へ月にどのくらい読むか問うと「1冊か2冊」と答えたが、少ない時間の中で好きな本をじっくり読むために「1日10ページと決めている」と答えた。全国学力調査の結果では、福岡市の児童生徒は読解力に課題があるということがわかった。この読解力と読書を安易に結び付けがちだが、実は読解力とはセンテンスの行間にあるものを抽出したり情報を取り出したりして自分の考えを作り出すことで、批評や批判といった一連の思考活動を含めて読解力という。中身に何が書いてあるかを理解するだけではない。通常の読書において単に書いてあることをそのまま読むのではなく、じっくり読む、考える、思いを膨らます、そんな読書が読解力につながっていくという分析があり、読書の量だけではなく質といったものに目を向けていった方がいいのではないかと思った。

白根委員長　新聞記事に、俵万智さんと松村由利子さんが西南学院大学の講演で話した内容があり、歌人の吉川宏志さんの短歌「花水木の道があれより長くても短くても愛を告げられなかった」をあげ、ある学校の学生達に愛は告げられたのか告げられなかったのか質問したら、大多数の学生が告げられなかったと回答したとのことだった。読解力がきちんと育つような、読書の仕方というか読む本の質も重要である。最近すごく人気がある絵本を読んでも、ワーとかキャーとかいう擬態語、擬声語だけで主語と述語、目的語がきちんとある文章がとても少なかった。こういう本を何冊読んでも本当の読む力にはつながらないのではないかと思う。読み継がれたきちんとした文章の本を今後しっかり読む習慣をつけることも大事だと改めて思った。

松本委員　東光小学校では国語科のテーマとして読解力に力を入れており、細かい分析をしたうえで、高学年になっても質と量が落ちないように学校全体で取り組んでいる。低学年は多読でどんどん読ませる。他の学校は3、4年生頃から徐々にトーンダウンしていくが、ここではそれをさせない努力を先生達が学校全体でやっているのが違うと思う。1年生の担任が3～4年生が読む「エルマーの冒険」をクラスで読み聞かせたら1年生でも本を借り、次に「くまの子ウーフ」を紹介すると、エルマーが読めるようになっているので簡単に読めたそうだ。中学校でも本当に読む子は大人の文芸書、直木賞受賞の本も読んでいる。朝読だけでもきちんとやっていかなければ、個人に任せるだけでは足りないと思っている。今小学校でも時間が無いので、15分は無理でも週に1回必ず朝読の時間を設ける。学校全体の取組もあり、東光小学校と同じことはできないと思うが、せめて朝読を主としてできるといいと思う。

学校指導課　朝読の調査では、実施している小学校は144校中113校で割合は78.5%、実施していない小学校は31校。週5回やっている学校が13校、4回が9校、1回が12校、不定期が65校で最も多い。中学校は、実施している学校は69校中48校、割合は69.6%、週5回以上が45校、週3回が1校、不定期が2校。小学校より中学校の方がしっかり朝読書をしている。

上村委員 今説明された中学校は自分で本を持ってきて読んでいるのか。小学校は自分で読むこともあれば読んでもらうこともあるということか。毎日読む時間を設け週1回はボランティアがくるということか。

学校指導課 そうである。

白根委員長 昨年の学校読書調査アンケートで、まわりの先生や司書から本を紹介してもらったことはあるかとの質問があり、小学生でも6割近くの子どもが本の紹介をしてもらったことがないと回答していた。面白い本があることを知らないのだから本をよく知っている人達がこんな面白い本があるよと紹介していくことも必要かと思う。手渡す人がいないと子ども達と読書が結びつきにくいと思う。本のことを知っている学校司書がいるのはとても大切だと思う。司書教諭講習の科目に読書と豊かな人間性などあるが、その程度のことは全ての先生方に学んでほしいと思う。そうするとまた変わってくる気がする。

西川委員 授業の中で学校図書館を使ったりブックトークを入れたり本を紹介することは、子ども達にとっては非常に大事な活動の一つだと思う。今年、小学1年生に日本の昔話「桃太郎」のブックトークをした。桃が流れてくる様の表現は本によって違い、「どんぶらこどんぶらこ」だけではない。様々な表現があること自体、先生も知らないし、子ども達もそんなところから興味を持って読むこともある。それを授業の中でどのように使っていくかが大切と思う。読書の質というか、大人が紹介したい本と実際に子ども達が手に取る本にはギャップがあり、そこをどう埋めていくかが重要だと思う。

松本委員 今、小学校でも朝読の時間が無い学校もある。週に1回は学校全体の取組として必ず朝読の時間を設け、読書する時間を確保してほしいと思う。

香川委員 学校司書の件だが、全校配置は無理でもせめて中学校区に一人を目標にできないか。学校司書は4～5校担当校を持っているが、小学校から中学校へのつながりを考え一中学校区に一人、しかも一年で交代ではなく、地域性もあるのでせめて最低でも3年以上継続してほしい。1年目はその学校に慣れることで精一杯、2年目によく自分のやりたいことが少しでき、3年目に子ども達との関係を作っていけると聞く。なるべく同じ地域で3年以上をお願いしたいと思う。

学校指導課 学校司書に関しては、いろいろいただいたご意見や要望を真摯に受け止め、その中でベターな方法を模索し続けていきたいが、中学校区のことも考えていかなければと思う。昨年7名増員して43名配置と大きく転換した。学校司書には苦労をおかけしているが、来年度に向けて具体的な配置の方法を含め取り組んでいく。すぐに増員は無理だが全校配置を目指した取組を進め、まずは学校司書の声をしっかり聞いていきたい。

白根委員長　政令都市で全校配置しているのが横浜と神戸である。どちらも非常勤なのが残念だが、神戸は平成 26 年 10 月にモデル校を作り、小学校 20 校、中学校 10 校から少しずつ増やし、平成 31 年 4 月には小学校 104 校、中学校 52 校の全校に配置した。これはトップである市長の考え方かなと思い、どうやったら動かせるのか一番の関心事である。

三宅副委員長　3 年先に何校目指すとか、数値目標を持つ。メディアの啓発で学校に呼ばれた時に図書館を使用するが、図書館がよく使われている学校や司書がいる学校は図書が動いている感じが歴然とする。図書館が全く使われていないような学校にも伺うことがあるが、動いている図書館にいくと本が整理されており、生徒と工夫してポップを作ったり、イベントのチラシを図書館に貼ったりと、美術館のように文化度が高い。こういう中で子ども達も育っていけば量も質も上がると感じる。頑張って何年後にここまでやりましょうというのを是非お聞きしたい。夢を持って進んでいけばいいと思う。

上村委員　小学校で図書委員だった子は中学校でも活躍している。

私は多くの人に手に取ってほしい本を紹介しており、小学校では滅多に動かない本、例えば 4 年生にエンデの「モモ」を、5 年生にカニグズバーグの「クローディアの秘密」を紹介すると、図書館の本が動くようになった。自宅で文庫をやっており、4 年生の男子が何か本を紹介してほしいと訪ねてきた時、いくつか本を見せ、「二年間の休暇」（十五少年漂流記の完訳本）の内容を話すと、その本を借りて行き、寝るのを惜しんで読んでいると母親から聞いた。少しずつ読書力をつけていき、ある時期になったらその子に本を手渡す大人として、学校の先生や図書館司書、周りのボランティア、親がいてくれるとよいと思う。

白根委員長　様々な視点から貴重なご意見をいただきありがとうございました。皆様からのご提案、ご意見を参考に、福岡市の子ども読書活動が推進されるように行政はもちろん、私達委員一人一人も取り組んで行きたいと思う。